

## 「王位を受けるための旅立ちと帰国後」

2015年11月16日

ルカによる福音書 19章 11節～15節、27節。人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。

(27節)「ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』」

ルカ福音書 19章 11節～27節の譬えでは二つのことが語られている。一つは、立派な家柄の人が僕たちにお金を託し商売をきなさいと命じ、王位を受けるために旅立った話である。彼は王位を受けて帰国し、託したお金を清算し、最後に、肅清したと加筆している。

人々が主イエスの話に熱心に聞き入っていると、主イエスは譬えを語り続けられた。この時、弟子たちはじめ、周りは熱気に溢れていた。エリコから山道を登りつめればエルサレムに着く。そのエルサレムで、主イエスが偉大な力を表し、神の国がすぐにも現れると期待していたからである。彼らが望んだ神の国はローマ帝国の属国から脱却し、自由と平和が実現する国であった。主イエスは、彼らの誤解を解くために譬えを語られた。

「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。」この譬えを聞いた人々は皆、すぐに、互いに知っている出来事を連想した。ヘロデ大王が紀元前4年に死去した後、息子のアルケラオが父の継承者として王位を受けたいとローマ皇帝の所に行った。彼は王とは認められなかったが、領主としてユダヤ、イドマヤ、サマリアを10年ほどの短い期間、治めた。アルケラオは民から嫌われており、ユダヤ人の55名からなる一団が、王位継承を阻止するためにローマに行っている。彼は悪政を行ったため、ローマ皇帝によって退けられた。

主イエスは、この史実を基に語っている。譬えは、王になって帰国した後、託したお金の清算をし、働いた者と怠けた者を厳しく峻別している。そして最後に「ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ」と王位に着くことに反対した者たちを肅清したと恐ろしい結末を付け加えている。

主イエスの譬えは「終末信仰」を語っていると思われる。人々はエルサレムに上る主イエスにローマからの独立、解放をもたらす政治的なメシアを期待していた。それは誤解である。王位を受けるために旅立った人のように、私はあなた方の前からいなくなる。十字架で殺され、見えなくなる。しかし、真の王として再臨する。その時、私がメシアであることを受け入れず、憎み、敵対した者たちは打ち殺される。これは、終末時の神の裁きであろう。政治の次元とは異なる終末時の全き裁きを語り、主イエスが去ってから再臨まで忠実な信仰と責任ある働きを求めた譬えと理解される。